

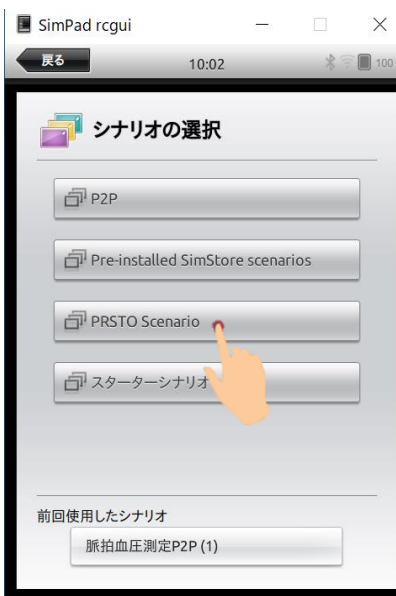
PROST (SimPad) ユーザーガイド

シナリオセッションを開始する

①「オートモード」を選択



②シナリオの選択から
「PROST Scenario」を選択

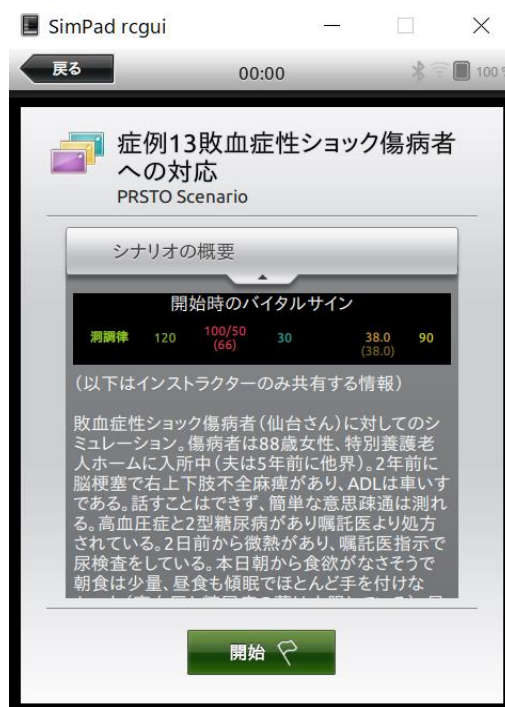


③実施するシナリオを選択

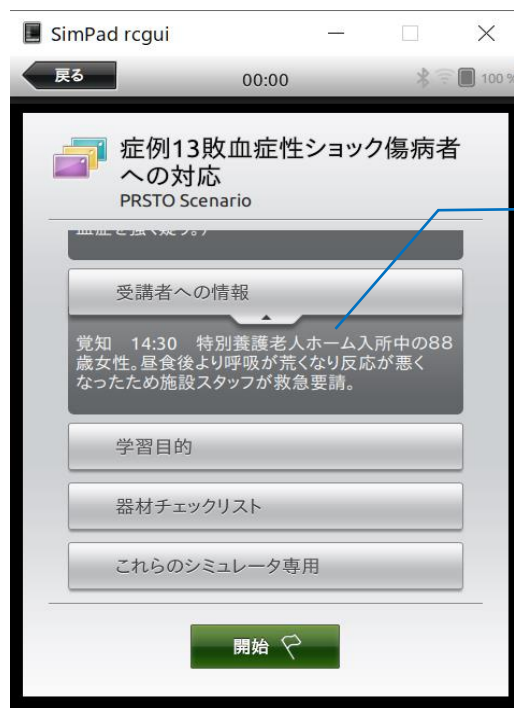


④「シナリオの概要」、「受講者への情報」、「学習目的」、「機材チェックリスト」確認

「シナリオの概要」には傷病者の初期バイタルサイン、シナリオの詳細が記載されています。シミュレーション直前にシナリオの最終確認ができ流れをイメージすることができます。



「シナリオの概要」の画面をスクロールすると「受講者への情報」、「学習目的」、「機材チェックリスト」があらわれます。機材の準備は基本的にシミュレーションの準備時に「機材チェックリスト」に沿って行います。

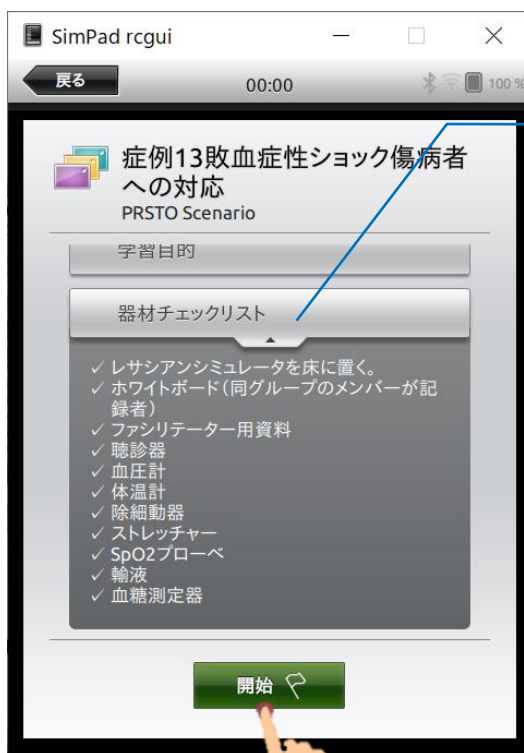
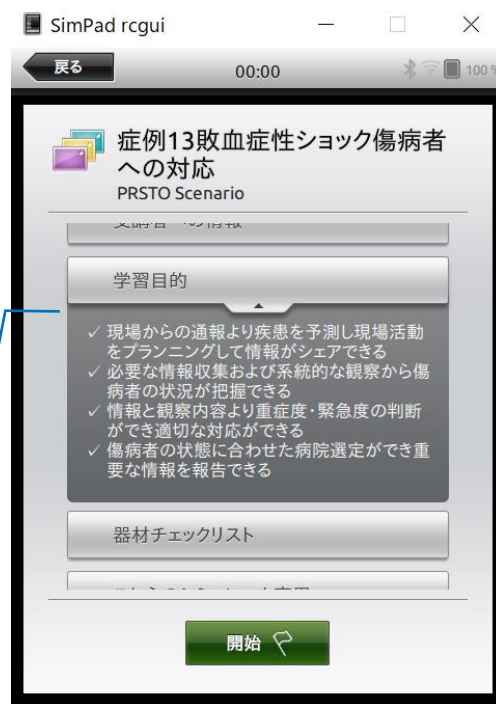


受講者への情報

シミュレーション直前に受講者へ読み上げます。

学習目的

SimPad 上「学習目的」とありますが、正式には学習目標です。



機材チェックリスト

シミュレーション前に準備しますが、最終チェックをします。

記入不要



⑤シナリオの開始

ファシリテーターの役割

「出動準備」・「観察」・「情報収集」・「判断-処置-特定行為」の4つのカテゴリーに分かれチェックリストになっています。

ファシリテーターは受講者の行動を確認し、実施できた項目をタップしていきます。タップされた内容はデブリーフィングログに登録されます。

「現場到着」をタップすると、現場活動時間の計測をスタートします。

チェックリスト

チェック項目をタップするとカウントされます。

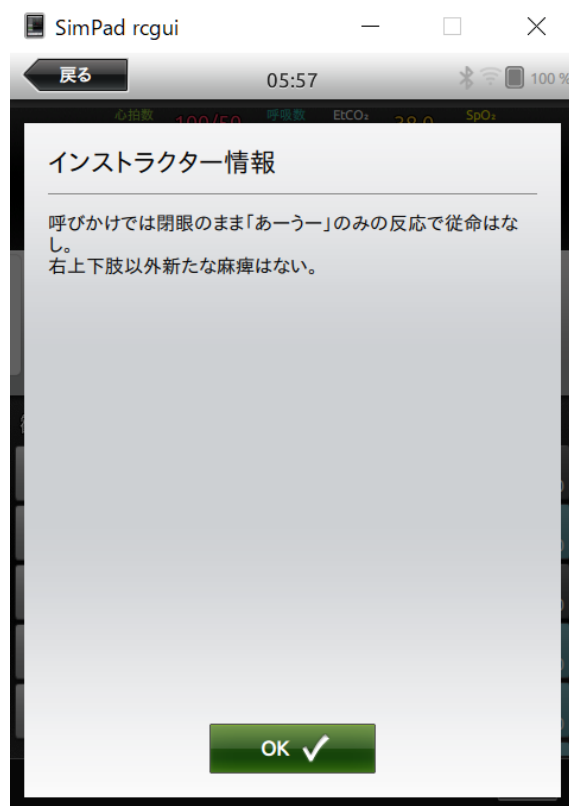


ポップアップメッセージ

チェックリストをタップすると必要な情報が SimPad 上にポップアップメッセージとして表示されます。

ファシリテーターはその情報を読み上げます。例えば、受講者が意識レベルを確認した時に、以下の様なメッセージが表示されます。

ポップアップメッセージ



複数の選択肢がある項目

例) 酸素投与

酸素投与をタップすると以下のスライダーが表示されます。受講生が判断した酸素流量に合わせると、SpO2の値が変化します(SpO2が変化しない症例もあります)。



必要量以上の酸素を投与すると症例によっては SpO2 が上昇します。



例) 気道デバイス



受講生が選択したものをタップ。選択したものがログに残ります。



バイタルサインを変更したいとき

受講者の反応を確認しながら、バイタルサインを変更した方が良かったときは、シナリオ進行中でもバイタルサインの値を変更することが可能です。



バイタルサイン欄をタップする。

変更したい数値をタップする。



変更したい数値を設定し、実行方法ボタンをタップする。

「戻る」をタップするとシナリオ進行画面に戻ります。



⑥シナリオセッションを終了

車内収容、病院への収容依頼が終了し現場出発した時点でシナリオは終了です。

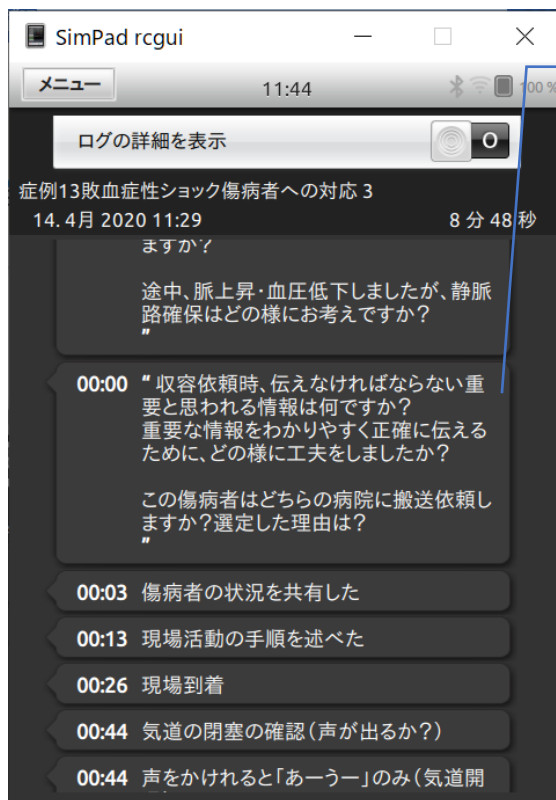
「ログを見る」をタップするとデブリーフィングセッションに移動します。



現場出発をタップするとシナリオが終了し現場活動時間の計測も終了します。



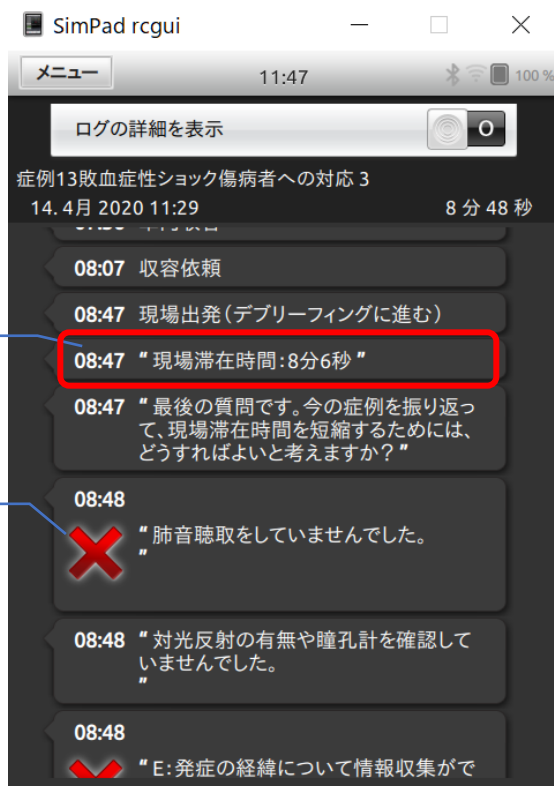
⑦デブリーフィングセッション



振り返りのコメント。ファシリテーターはここを読み上げて受講生から考えを引き出します。

現場活動滞在時間。

実施できていなかった項目。



デブリーフィングとは

デブリーフィングは学習者の行動や思考を振り返るプロセスであり、シミュレーション後にファシリテーターと学習者で行われる。ポイントは、将来同様なケースに遭遇した時に、デブリーフィングで学習したことを実践の現場で行動変容できるかどうかである。ファシリテーターは学習者の思考やディスカッションが活性化するように支援を行う。シミュレーション教育では、デブリーフィングにより学びが促進すると言われており、シミュレーションセッションの2～3倍の時間を取ることを推奨している。つまり10分のシミュレーションであれば、デブリーフィングは20～30分必要となる。

PROSTは、4つの学習目標から振り返りをするように設定してある。基本的には、SimPadのログに振り返り用のコメントが記載されているので、ファシリテーターはそれを読み上げ、学習者のディスカッションを促進させる。ログの振り返りコメントだけではデブリーフィングは不十分なため、PROSTではプラス/デルタ(+/ Δ)法によるデブリーフィングを推奨している。

プラス/デルタ(+/ Δ)法

- ・プラス(+)/デルタ(Δ)法は個人またはチームが、より高いレベルのパフォーマンスを達成するために、継続的な改善を見出せるような自発的な振り返りを促すことが目的。
- ・この方法は、「何が達成できたか、または何がよくできたか」(+)と、「何を改善すればよくなるか、及びどの様にして改善をするのか」(Δ)の2点にフォーカスしている。
- ・プラスはよくできている点を認識させることで、臨床現場でも継続してその良いパフォーマンスを発揮できるようにする。デルタは次のシミュレーションや今後の臨床現場でのパフォーマンスを上げるために必要な思考または行動、または両方の改善点を見出すプロセスである。
- ・プラス/デルタのメリットは簡単で素早く効果的にフィードバックできる。デメリットは、複雑なシミュレーションや深く考える内容のものには向いていない。重要なことは反省会にならないように心がけることである。

例)

- ✓ ファシリテーター: 今回のシミュレーション中に実施した観察の部分で良かった点は何ですか？(プラス)
- ✓ なぜ、それが良かったと思いますか？(プラス)
- ✓ 他の皆さんは、その良かった点についてはどう思われますか？(プラス)
- ✓ 実施した行為の中で、何か改善が必要な点がありますか？(デルタ)
- ✓ 現場活動時間が15分でしたが、時間短縮するためにはどうすればよいですか？(デルタ)
- ✓ 将来、同様なケースに遭遇した時に、どの様に対応しますか？(まとめ)